
農業・農村空間から環境を考える

内藤和明（兵庫県立大学／兵庫県立コウノトリの郷公園）

1. 講義のねらい

この講義では、里山、半自然草地、農地などの、二次的自然の中で生息する動植物に焦点を当てながら、農業・農村空間が身近な生物の保全に果たす役割を考えます。前半では、中山間地域における絶滅危惧植物の保全の話題を中心に紹介し、後半では、平場の水田地帯である豊岡盆地で進められているコウノトリの野生復帰事業について紹介します。対象地域も対象生物も異なるふたつの話題は、一見無関係に見えますが、いずれもこれからの日本の農業と農村の持続可能性を考える上で重要な課題を投げかけていると思います。

2. 講義の概要

中山間地域における絶滅危惧植物の保全：

中山間地域の里山や半自然草地では、定期的な伐採、採草、放牧、火入れなどの、農業や日常生活に伴う伝統的な土地利用によって半ば無意識のうちに植物が保全されてきました。しかし過去数十年に生じた開発や管理の放棄によって、里山や半自然草地の植物は危機にさらされており、絶滅が危惧されるものも少なくありません。このことは、2002年に策定された「新・生物多様性国家戦略」の中でも第一および第二の危機として取り上げられています。二次的自然に生育する絶滅危惧植物の生態と保全のための取り組みを、演者が関わった種を中心にいくつか紹介します。

豊岡盆地におけるコウノトリの野生復帰：

兵庫県北部の平場の水田地帯である豊岡盆地には、日本で最後までコウノトリが繁殖していました。1971年にいったん野生では絶滅しましたが、それ以前から50年以上にわたって保護活動が継続されてきました。施設での繁殖が軌道に乗り野生復帰への機運が高まる中、野外への再導入が2005年に始まり、田園景観の中でコウノトリが舞う姿が再び見られるようになりました。豊岡盆地では現在生息環境を復元するための様々な取り組みが進められています。中でも豊岡盆地の平地の大部分を占める水田生態系は、食料生産の場であると同時に、コウノトリの採餌場所として重要な役割を果たしています。コウノトリの再導入への歩みと、農業と野生復帰の相互関係について紹介します。

3. 参考図書

池田 啓（2007）コウノトリがおしえてくれた。フレーベル館。

亀山 章・倉本 宣・日置佳之（2005）自然再生-生態工学的アプローチ- ソフトサイエンス社。